

「謀略の丘」は語る

戦争遺跡・登戸研究所

①

今年、明治大学生田キャンパス（川崎市多摩区）に登戸研究所資料館が開館しました。旧陸軍の謀略戦の研究拠点だった同研究所。隠された歴史はなにを語るのか。明治大学非常勤講師の渡辺賢二さんに寄稿してもらいました。

明治大学平和教育登戸研究所資料館は、旧陸軍登戸研究所（以下、登戸研究所）の生物兵器研究のために建てられた鉄筋棟を改装した資料館である。戦争遺跡をそのまま活用し、そこで何が行われていたのかを伝える資料館は類例のないものである。

資料館がオープンしてきたのは明治大学の英断による。大学は、この場合「歴史教育・平和教育・科学教育の発信地にする」ともに、地域社会との連携の場にしていく」として、いかなることも素晴らしいことである。

こうした成果を生む背景には20余年の長きにわたって多くの人が努力してきたこと

があった。とりわけ、登戸研究所に勤務していた人たちが重い口を開き、資料を提供してくださり、また資料館建設を大学に要望していたことが決定的であった。

小田急線生田駅で下車し、10分ばかり歩くと明治大学生田キャンパスに着く。入り口から急坂を登り切った右手にこんもりとした森があり、当時弥心（やごころ）神社と呼ばれた神社がある。そしてその境内に「登戸研究所跡碑」と記された碑がある。この碑の建立過程が資料館の原点である。

実は、戦後32年を過

神社の中の記念碑

歴史の重さ凝縮



神社の境内にたつ登戸研究所跡碑（川崎市多摩区の明治大学キャンパス内）

きた1982年になって登戸研究所に勤務した人たちが再会し登研会を結成し、碑の建立の立案をしたのである。そして6年後に会員のキャンパで明治大学の許可を得て、現在の場所に碑は建立された。

碑文の案も当初は3案出され、会員の投票で正面には「登戸研究所跡碑」、そして裏面には「すぎし日はこの丘に立ち めぐり逢う」という「想い」を込めた句が刻まれた。私は当初、この句に

違和感を覚えた。しかし、登戸研究所に勤務していた方々に接するに従って次第に分かるようになっていった。この句はまず「すぎし日は」で切って当時を想起して初めて理解できるのである。この丘でやった出来事の重さ、戦争中にもかかわらず恵まれた環境、戦後も家族にも話せなかった孤独感などがすべて凝縮されている。そしてそれから解放される日が近づいたことを示していたのである。

（つづく）

渡辺氏の略歴：元法政二高教諭、元歴史教育者協議会事務局長、現在、明治大学非常勤講師、「旧陸軍登戸研究所」の保存を求める川崎市民の会「共同世話人代表。著書に『近現代日本をどう学ぶか』共著に『陸軍登戸研究所』など。

「謀略の丘」は語る

戦争遺跡・登戸研究所

現在の明治大学生田

校舎の正面入り口の裏手の目立たないところに「動物慰霊碑」がある。3メートルある立派なものだ。この碑は私にとって登戸研究所の調査に入る原点でもある。

24年前に川崎中原平和教育級の企画委員(市民・高校生・市職員)が地域の戦争を知ろうと調査活動を開始した。あるジャーナリストから生田で戦時中、稲が実らなかつたことがあると聞いた私たちは見学会を計画した。

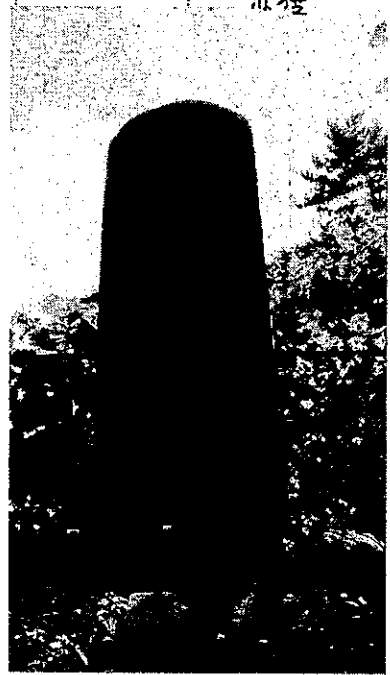
新聞報道があったためかこの「動物慰霊碑」を見ていたとき一人の老人(井上三郎さん)故人が現れたのである。そして自分はこの第四科で働いていたことを証言した。ところが不思議なことに当

倫理観失った科学者

3メートルの動物慰霊碑

明治大学入り口近くにひっそりとたつ「動物慰霊碑」

②
2010.8.19
赤松



時この大きな碑は知らなかつたという。科が違えばそんなものだった」とこともなげにい

う。井上さんは「最近には研究会ができ、他の科の人とも交流している」とことも話され、川崎市域に健在である人の紹介もしてくれた。

私たちは、早速、川崎市教育委員会の承認のもとで99人の当時川崎に在住の登戸研究所勤務員にアンケートをお願いした。22人から貴重な返事をいただいたが、その中に第二科(生物・化学兵器担当)にタイピストとして勤

務されていた小林コト(旧姓、関さん)から貴重な「雑書綴(つづり)」という資料が提供された。

このなかから青酸二トリルや蛇の毒などいろいろの毒物兵器を開発していたことが分かった。そして1943年4月、伴繁雄さんらが陸軍技術有効章を授与されている事実を知った。そのとき副賞1万円(現在では約1000万円)をもらいそれで碑と弥心神社を建立したことを知る。

さらに、調査すると、伴さんは48年の帝銀事件(帝国銀行支店で行員16人に毒物が飲まされ12人が死亡、現

金・小切手が強奪される)の際、警視庁の捜査に協力していた。登戸研究所で研究・開発した毒物を731部隊の石井四郎中将が管轄する中国の南京の病院で人体実験をしていたことも分かった。その証言の中で「最初は嫌だったがだんだん趣味になった(薬の効き目が分かるので)」と言っている。

通常の倫理観を失っていく科学者の様子が分かる。巨大な「動物慰霊碑」はこうしてみると登戸研究所を象徴するモノUMENTである。(明治大学非常勤講師 渡辺賢二) (つづく)

「謀略の丘」は語る

戦争遺跡・登戸研究所

2010.8.20
③ 赤坂

明治大学生田キャンパスは、その全体が戦争遺跡となっている。正門をまっすぐ進むと、左手に大きなヒマラヤスギがそびえ立っている。実はこの杉は、登戸研究所の本館前に植樹されたものだ。ヒマラヤスギは登戸研究所の全貌（ぜんぼう）を知っていると

いえよう。本館跡を左に曲がると広い道がある。当時のメインストリートである。その途中に陸軍のマークが付いた当時の消火栓がある。さらにまっすぐ進むと右手に大きな木造の建物がまだ残されている。私たちがそこで行われていたことを知るまでにはさらに時間を要した。その理由は登戸研究所自体が秘密戦

(防諜)ばつちよう

「秘密中の秘密」の場所

中国紙幣の偽造工場だった木造建物
＝明治大学生田キャンパス内



紙幣偽造の木造棟

・諜報・謀略・宣伝
という隠された研究所であったが、ここ第三科はさらに「秘密中の秘密」の場所であり、3層くらいの板塀で張り巡らされ、第三科の人以外には所長くらいしか入れなかった場所だったからである。ここに勤務していた人たちは戦後30年過ぎて登研会を結成したが、

資を購入しようというものであった。39年くらいから本格的に製造したが、アジア太平洋戦争に入ると香港を占領し、そこから紙幣の原版を手に入れた。だからそれ以降はその作業に従事した大島康弘さんにいわせれば「本物も偽物もない」状態となったのである。その印刷工場だった場所が現存する木造建物である。

42年当時、国民政府の最高額の五元、十元札を偽造し、使ったこの作戦は一時的には大きな成果をあげた。しかし、米英は直接空輸で千円、一万元という額の法幣を国民政府に供給したため、偽札の影響力は次第になくなった。敗戦後この「謀略の丘」は証拠隠滅命令によって偽造紙幣焼却の煙が長期間途絶えることがなかったという。(明治大学非常勤講師 渡辺賢二)

(つづく)

「謀略の丘」は語る

戦争遺跡・登戸研究所

2010.8.21
④
五 誌

登戸研究所資料館は、今はきれいに塗装され窓枠なども変えられているので一見、新しい建物と錯覚してしまう。しかし、この建物こそ風船爆弾に搭載する予定の牛疫ウイルスや中国大陸で大量に散布した植物を枯らす細菌兵器を開発した鉄筋棟であった。

中に入ると外見と違い天井は高く広い空間を使った気密性のある建物であることが分かる。当時の流し跡や暗室などの保存もよくとれている。

展示内容は、山田明文学部教授(資料館館長)の指導のもと大学院生が総力を挙げて作成しただけに大変充実したものとなっている。第1展示室は、登戸研究所の全体像が概観できる。1937年に陸軍科学研究所の電

秘密戦の実相明かす

細菌兵器の開発棟

細菌兵器の搭載も計画された風船爆弾の模型
＝登戸研究所資料館内



波兵器の実験場として最初の出發をしたという。標高30メートル以上のところに設置されたのは電波の送受信に適していたからだ。そして39年以降は次第に秘密戦研究所として姿を変えていく様子が説明されている。登戸研究所は中野学校(特務機関員養成・東京都中野区)と連動し、他の陸軍技術研究所と性格を異にしていたことも大切なことである。

第2展示室では風船爆弾や電波兵器など主に第一科といわれた物理的な兵器の開発状況が解明されている。とりわけ風船爆弾が当初、細菌兵器を搭載して発射する計画が存在していたことが証明されている。実際には搭載しなかったが細菌兵器を開発していたことが脅威を高めたことは想像できる。

第3展示室は生物化学兵器やスパイ用品などを開発していた第二科の内容が紹介されている。当時の書類をまとめた『雑書綴』から見えてくるものが細かく分析されている。第4展示室は第三科の偽札作戦の顛末(てんまつ)が紹介されている。そして第5展示室では本土決戦体制時の登戸研究所の役割、戦後の登戸研究所勤務員がたどった様子、その関係者が資料館建設を要望するいきさつなどが展示されている。全体として科学が戦争に動員されていくときの布き、裏面史としての秘密戦から見えてくる戦争の実相などを、史実を通して学ぶことができる価値は大きい。(明治大学非常勤講師 渡辺賢二)

(つづく)

「謀略の丘」は語る

戦争遺跡・登戸研究所

10. 8. 22
⑤ 赤坂

第5展示室の後半で、登戸研究所勤務員がどのようにして若い世代に語り始めたかが詳しく説明されている。その実際の様子を知っている者の一人として当時は再現してみたい。

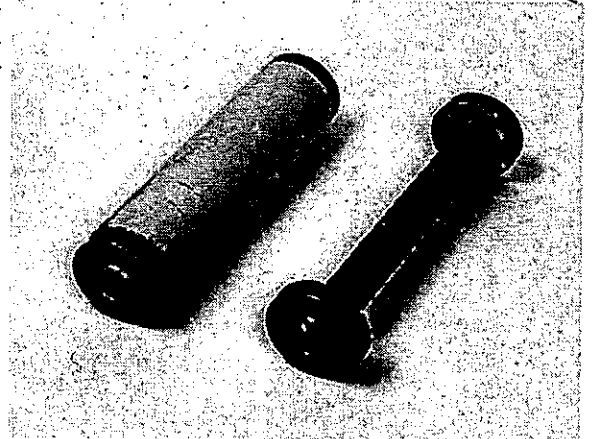
私たちが市民とともに登戸研究所を調査し始めた1987年ごろ、ちょうど元勤務員の関係者はまとまり始めていた。そして少しずつ聞き取りも可能になってきた。しかし、肝心な内容になると口をつぐむことも多かった。

そうした聞き取り作業に次第に高校生が参加するようになっていく。動機は「核兵器は調べたので、次は生物・化学兵器を調べてみたい」という程度のものであった。しかし、登戸研究所

関係者に口開く高校生

石井式濾過器

細菌戦部隊が生き残りのために管理していた石井式濾過器



に勤務した人の口は重かった。後で分かったことだが、川崎市で調べていた高校生とは別に長野県駒ヶ根市でも登戸研究所に勤務していた人の聞き取りをしていた。そしてほぼ同じ時期に「おとなには話さないが君たち高校生には話そう」と関係者が口を開いたのである。高校生たちの努力によって隠されていた真相が次第に浮き彫りにされていった。

その一つは731部隊の石井中将が開発した石井式濾過(ろか)器の濾過筒についてである。元勤務員の伴繁雄さんは長野県の自宅に大量にあった濾過筒を提供してくれた。細菌戦部隊を管轄する防疫給水本部が自分たちの生き残るための秘密兵器として管理していたものであることがわかった。それが本土決戦体制の末期に長野県に大量に供給されていたのだ。

ところが高校生たち

の発想はそれを理解しただけにとどまらなかった。濾過筒には「軍事秘密」とかかれていたが「それは戦争中の話で今でも役立つ技術ではないか」と彼らは考えた。そして横浜の工場を探し出すとすぐに訪問した。会社からは「調査に君たち高校生がきたのは進駐軍以来」といわれ、同時に今でも学校のプールなどの濾過に使われていることを知る。

こうして高校生たちは「戦争と平和はそんな遠い関係ではない」「自分たちが科学や技術を平和にいかすかそれとも戦争に使うかはいつでもしっかり考えなくては」という結論に達したのである。

若い世代が「登戸研究所遺跡で学び」「戦争と向き合い」「歴史と対話し」「科学や技術を真に平和な社会に貢献できる」力を育てることを期待したい。

(明治大学非常勤講師 渡辺賢二(おわり))